

にら一年一作栽培技術の確立（定植時期）

【背景】

県内のにら栽培では、5月下旬～6月上旬に定植し、十分な低温遭遇（5℃以下、300時間が目安）後に保温して収穫する「二年一作」体系が一般的です。しかし、定植1年目に株養成（収穫を行わず株を育成）を行うため、収穫開始までに約8か月を要するだけでなく、地上部を一度捨て刈りするため、収穫物が十分に活用されず廃棄されるという課題があります。

そこで、「一年一作栽培技術」の確立に取り組みました。令和6(2024)年6月6日に定植し、捨て刈りを行わず約3か月後の9月10日から収穫を開始した結果、令和7(2025)年3月24日までに6回収穫し、約5t/10aの可販収量が得られました。

一方、高単価となる夏季の秀品率（AL率）は約30%と低く、定植直後の梅雨入りや、梅雨明け後の高温条件（40℃超）により、株養成期の生育が阻害されたことが主な要因と考えられました。

そこで本年度は、定植を4月25日、5月12日、6月2日（いずれも90日育苗）の3時期に設定し、秀品率や可販収量への影響を評価しました。

【結果】

4月25日及び5月12日定植では8回、6月2日定植では7回収穫しました。収穫1～2回目の秀品（AL品）収量は4月25日定植で最も多く、可販収量及び粗収益も同様の傾向を示しました。

これは、4月25日定植では、株が充実した状態で初夏の高温や梅雨に遭遇したのに対し、5月12日及び6月2日定植では、株の充実が不十分な段階で同様の環境条件に遭遇したためと考えられました。

以上より、夏季の高単価時期における秀品率及び収益性の向上には、4月下旬の定植が適切であることが明らかになりました。なお、県内生産者ほ場（上三川町）においても、同様の傾向が確認されました。

【今後の試験内容】

収益性の向上とハウス内作業環境の改善に向け、昼夜を通じた総合的な暑熱対策により、作物及び作業者の双方にとって最適な夏季のハウス内環境の実現を目指した試験研究を進めていきます。

表 収穫日

区	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	8回目
4/25 定植	7/29	8/19	9/16	10/31	12/16	1/29	3/2	3/25
5/12 定植	8/4	8/25	9/24	11/5	12/23	2/5	3/3	3/25
6/2 定植	8/20	9/16	10/31	12/16	1/29	3/2	3/25	—

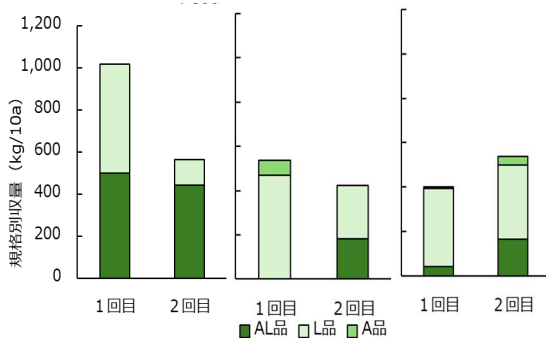


図1 規格別収量 (kg/10a)

注1 左から4/25、5/12、6/2 定植
 注2 AL品：葉幅8mm以上、
 L品：葉幅6～8mm、
 A品：葉幅4～6mm

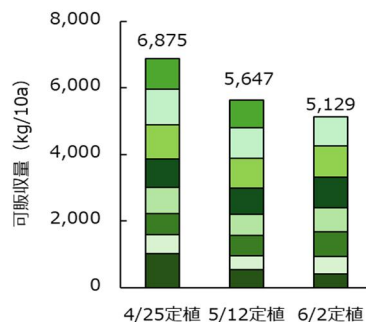


図2 可販収量 (kg/10a)

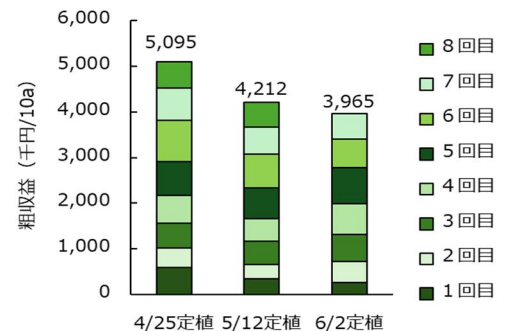


図3 粗収益 (千円/10a)

注1 粗収益は、10a当たり規格別収量×規格別単価の合計
 注2 規格別単価は、県内A農協におけるR4～R6の3か年平均より試算